

# 『日本考略』に見るガ行音について

馬 之濤

【キーワード】 寄語・中古音・全濁・入り渡り鼻音・呉方言

## 1. 『日本考略』について

中国、明の嘉靖年間、中国の沿岸における倭寇の騷擾の激化に伴い、中国人は日本に対して関心を寄せ、日本に関する書物も続々と現われた。嘉靖二年（1523）定海の人である薛俊<sup>せつしゆん</sup>によって編纂された『日本考略』もその中の一書である。『日本考略』は日本に関して全般的に紹介した書物であり、特に「寄語略」の章は語学的なもので、日本語語彙を漢字で音訳した一章である。薛俊が呉方言の地域にある定海の出身であり、さらに寄語からも呉方言の特徴が見出されるため、寄語は呉方言に基づいて編纂されたものである可能性が高いとこれまでも指摘されてきた<sup>1</sup>。

日本語を記録した同類の資料には、早くは南宋の羅大経<sup>らたいけい</sup>による『鶴林玉露』、明初の陶宗儀<sup>とうそうぎ</sup>による『書史会要』が挙げられる。しかし、この両書には各々僅か十数語の日本語しか収録されていないのに対して、『日本考略』には三百六十数語もの日本語が記載されている。『鶴林玉露』と『書史会要』が中国人に日本語の存在を紹介する書物であるとすれば、『日本考略』は中国人が日本語を学習するための初めての書物であると言える。

## 2. 先行研究

### 2.1. 寄語の解説

「寄語略」に収められた日本語について当時の中国語によって音訳したものが所謂寄語（日本寄語とも）である。『日本考略』によって音韻的研究を行う場合には、まず寄語に対する解説を行わなければならない。つまり日本語に当てられる字がどういう日本語を表しているかを解明することが必要である。

そのような解説を行った先行研究には、早くは17世紀の天啓本<sup>てんけいほん</sup>『武備志』<sup>2</sup>があり、また、19世紀にはイギリス人宣教師のエドキンスの語学的研究がある。20世紀に入ると浜田敦（1951）、福島邦道（1959）、大友信一（1963）などが出てくる。また、最近では木津裕子（1994）、丁鋒（2004）などが見られる。

<sup>1</sup> 2.1において言及するように、浜田敦（1951）、大友信一（1963）、木津裕子（1994）、丁鋒（2004）などである。

<sup>2</sup> 『續修四庫全書』（2002）及び『中國兵書集成』（1987）に収められた天啓初刻本影印本による。初刻版と言われるこの版本の寄語には片仮名が振られた所が多く見られる。原本は未見。

先行研究による解読はすでに大きな成果をあげているが、『日本考略』の初版はすでに散逸しており、現存の各版本には特に寄語略の章において異同が多く見られる。その各版本の異同により、先行研究の解読もそれぞれに異なっており、そのうえ解読されていない寄語もあるという現状をまず確認しなければならない。

筆者は先行研究では触れられていない『国朝典故』本、早大本を含む十種余りの版本を対照し、寄語本文の再構を行った。また、『日本国語大辞典』（第二版）や『漢語方音字彙』（第二版重排本）などを利用し、先行研究を基に、解読の確認と修正補充を進めた。紙幅の問題で、ここでは寄語の解読についての記述を省略し、本稿の主題に関わるガ行音の現れる項目だけを一覧表（資料を参照）にする。

## 2.2. 室町時代のガ行音の鼻音的要素

室町時代の日本語の濁音についてはロドリゲス『日本大文典』（1604）の記述に「D・Dz・Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソソネエテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである」（土井忠生訳註、1955）とある。それをうけて、橋本進吉（1950）は、このような濁音の前の母音が鼻音化することが室町末期に多くの地方で行われていたと述べた。

一方、朝鮮資料の『捷解新語』（1636年頃）には、日本語の濁音の前の音節末尾に鼻音が用いられている。例えば、*o-ʼyom-pi*（及）、*hoa-rum-pa-ru*（遙々）<sup>4</sup>。

勿論、従来から多く論じられてきた日本側の資料である『和字正濫鈔』（1693）、『以敬齋口語聞書』（1752写本）などにも鼻音的要素に関する記述が見られる<sup>5</sup>。

ただし、問題はロドリゲスの『日本大文典』ではD・Dz・Gの前の母音のことを語る一方で、濁音そのものについては述べていないことである。つまりガ行の子音がgかŋかあるいはŋgか、ロドリゲスの記述からは分からないのである。一方、福島邦道（1959）は朝鮮語ではそもそも音韻上清濁の区別をしないうために、『捷解新語』で濁音の前の音節末尾に鼻音を添えたのは、入り渡り鼻音を表したのか、単に濁音を示そうとしたのか、やはり疑問が残ると指摘した。また、日本資料の記述からも、従来、それを濁音の前の入りわたり鼻音と見るか、濁音の前の母音の鼻音化と見るかは先行研究の間に意見が分かれている。

では、中国語資料の『日本考略』においては日本語の濁音はどのように写されているのか。寄語では、ガ行音の前の音節には鼻音韻尾を持つ字がよく当てられている。

<sup>3</sup> 諸本の詳細については本稿末の参考資料に載せる。

<sup>4</sup> もとハングルをローマ字化、森田武（1957）による。

<sup>5</sup> 「ちとづとはあたりて鼻に入るやうにいはずればかなはず」（『和字正濫鈔』）。「『ち』『つ』の濁音を、つめて鼻へかける。」（『以敬齋口語聞書』）。

例： 扇 黄旗 アウギ  
 鑰匙 坑其 カギ  
 小麦 柯蒙崎 コムギ

この問題を取り上げ、濁音について言及している先行研究には浜田(1952)、福島(1959)、大友(1963)がある。浜田(1952)、大友(1963)ではそれを「鼻音的 Initial glide」あるいは「Initial glide の鼻音」<sup>6</sup>と呼んでいた。つまり、濁音の前に入り渡り鼻音の存在を主張しているのである。それに対して、福島

(1959)は「日本語特有の鼻濁音が音韻体系に見出されない、呉地方の中国人にとっては、鼻濁音をいかに表記したらよいか、などということは思いつかなかったことであろう。日本寄語における表記のしかたが、まちまちであり、不完全であることは、それをよく物語っている。第三の表記を、単なる濁音表記であると考えたい所以である」と述べた<sup>7</sup>。

確かに、ガ行子音が<sup>h</sup>gの音であったとしたら、η韻尾の字のみを用いるはずであるが、寄語におけるガ行音の前の音節にη韻尾、n韻尾両方の字が用いられているのは、それと矛盾している。ここは福島(1959)が指摘したように寄語の表記は「まちまちであり、不完全である」と言える。しかし、この問題について浜田(1952)、大友(1963)は一言も言及していない。

本稿では、この問題点に関する先行研究の間の異なる見解について、寄語に使用された呉方言の特徴から、当時のガ行音の音価を改めて検討してみたいと思う。

### 3. 中国語の全濁字と日本語の濁音

周知の通り、中国語の中古音における全濁字は無声化し、清音になる傾向があり、現代でも北方方言、粵方言、閩方言など広い地域において清音となっている。かつて全濁字であったころの特徴を今までも保存している方言としては、呉方言、老湘方言ろうしやうがよく知られている。先行研究で指摘されているように寄語が呉方言により編纂されたものであるところから見ると、日本語の濁音を表現するのに呉方言は北方方言より都合のいいものであろう。

ところが、寄語が呉方言に基づいて編纂されたとしても、寄語に見られる全濁字とその表す日本語の濁音との対応は必ずしも整然としたものではない。

例： 金 空揩泥 コガネ（「揩」は溪母k<sup>4</sup>である）  
 鋸 拏剛鑿利 ノコギリ（「擊」は見母kである）

<sup>6</sup> 浜田(1952)のいう「鼻音の渡り音」と大友(1963)の「Initial glide の鼻音」とを、ここでは「入り渡り鼻音」と呼ぶ。

<sup>7</sup> 福島(1959) p.70。「第三の表記」とは日本寄語において、鼻音韻尾の字の後の字が、濁音となっていることである。この論文では鼻音韻尾の字がなくても、当然濁って読むべき言葉を挙げたが、中にはガ行音の用例が挙げられていないため、本稿はそれについて論じないことにする。

上記の例のように、日本語の濁音に対して全濁字を使わないことには何か理由があるのだろうか。これについては、呉方言の方面から考える必要があるように思われる。

### 3.1. 全濁字と濁音との対応

中国語の中古音において、鼻音韻尾を持つ韻母は m、n、ŋ 韻尾と再構される三つのグループに分かれている。m 韻尾のグループには深撰、咸撰の字（入声では p 韻尾）、n 韻尾のグループには臻撰、山撰の字（入声では t 韻尾）、ŋ 韻尾のグループには通撰、江撰、宕撰、梗撰、曾撰の字（入声では k 韻尾）が含まれる。

下の表 1 ではカ行音・ガ行音の前の音節に当たる字を m 韻尾、n 韻尾、ŋ 韻尾、入声韻尾（p 韻尾、t 韻尾、k 韻尾）に分類し、さらに前の音節が開音節の場合、また該当音節が語頭の場合<sup>8</sup>とともに比較する。中古音における声母と日本語のカ・ガ行音との対応は縦に並べ、使われた三種の韻母の字を考察する。

【表 1】

前音節 当該音節を 表す字の声母		m 韻尾	n 韻尾	ŋ 韻尾	入声韻尾			開音 節	なし	保留 <sup>9</sup>	
					p 韻尾	t 韻尾	k 韻尾				
見母 (k-)	カ行	124	1	2	2		21	5	59	31	3
	ガ行	17		4	9				1	3	
溪母 (k'-)	カ行	22			1				4	17	
	ガ行	6			4					2	
群母 (g-)	カ行	3							3		
	ガ行	7			7						

【表 1】から、見母字と溪母字の多くはカ行音に対応し、一方群母字の多くはガ行音に対応していることは明らかである。しかし、ガ行音は全濁声母である群母字だけに対応しているのではなく、清音である見母字と次清音である溪母字にも対応しているのである。また、カ行音は群母字にも対応することが見てとれる。

なぜ全濁字とガ行音との対応は整然としていないのか。その理由の一つとしてガ行音に対応する群母字がいわゆる「三等韻」にしか現れないことが挙げられる。大友（1963）が「特に『が』に当てるにふさわしい群母の字は、その韻

<sup>8</sup> 表 1 の「前音節」の「なし」にあたる。例：莫恠 𪛗面乃礼 ゴメンナレ

<sup>9</sup> 保留：誤刻や脱字などと思われる、まだ解読できない音節。例：短 迷□加□  
ミ□カイ

母が一・二等の場合が多いからして、これに制約されて、殆んど見当たらないというのが実情である」と指摘したとおり、三等にしか現れない群母字は広母音のガ、ゴに当てにくく、見母と溪母字を使わざるを得なかったと考えられる。言いかえれば、ガ、ゴに当てようとするれば見母字と溪母字を用いるしかなかったのである<sup>10</sup>。

また、【表 1】のガ行音に注目すれば、ガ行音の前の音節に当たる字には鼻音韻尾を持つものが圧倒的に多いのが分かる。ガ行音に当たる 30 字(見母 17、溪母 6、群母 7)の内に前の音節に鼻音韻尾を持つものが 24 字ある。そして、他には 5 字が語頭に当たる音節、つまり前の音節を持たないものなので、これらを除くならば、例外は 30 字の内にわずか 1 字だけになる。ただ、カ行に当たる字の内、見母の 5 字と溪母の 1 字が前の音節が鼻音韻尾を持つものである。それについては後に述べることにする。

ガ行音に当たる 30 字 (見母 17 字、溪母 6 字、群母 7 字)  
24 字 (前の音節が鼻音韻尾を持つ音節)  
5 字 (語頭に当たる音節、前の音節なし)  
1 字 (前の音節が開音節)

こうしたことは、当時の中国人にとって、日本語のガ行音の鼻音的要素がかなり明瞭な特徴であったということを物語っていよう。

ところで、見母字には「ギ」に当たるもの<sup>11</sup>もあるし、群母字にも三例が「キ」に当たっているのは全濁字と濁音との対応が厳密なものではないことを示していると思われる。これについて大友(1963)は「無声音対有声音に加えて、Initialglide の鼻音があるかないかが、大きな標識であることが明瞭となる。しかも、無声音対有声音の対立が決定的でなかった事を思い合わせると、却って、この Initialglide の鼻音が、優位に立つ様にも考えられる」と指摘した。ここまでは、大友(1963)の結論に従ってよかろう。

### 3. 1. 1. 中古音における η 韻尾の字

【表 1】の中では鼻音韻尾を持つ 24 字の内、20 字が通摂、宕摂、梗摂の字であり、つまりこれらは中古音において、η 韻尾で終わる音節である。その内訳は次の【表 2】の通りである。

<sup>10</sup> 『韻鏡』で群母に属しない「扞」字が現代呉方言では全濁字となっているが、『日本考略』では「扞」がコに当てられるため(例:喜 搖落扞蒲 ヨロコブ)、『日本考略』において「扞」は全濁字でなく、清音として扱われていると考えられる。

<sup>11</sup> 末尾の資料の 17 番を参照。

【表 2】<sup>12</sup>

中古音		濁音の前の音節に用いられる字
通撰		公コ (1)、松ス (1)、空コ (3)、蒙ム (2)
宕撰		量レ (1)、羊ヤ (2)、剛コ (1)、昂ノ (1)、黄アウ (3)
梗撰	二等	萌マ (1)、坑カ (2)、更カ (1)
	三四等	明ミ (1)

現代呉方言では中古音の η 韻尾を完全には保っていない。勿論明代呉地方の方言音も中古音とは等しいものではなかった。その音価がガ行音の考察には重要な手掛りになるので、ここでは『日本考略』の成立時における通撰、宕撰、梗撰の音価を検討してみたい。

まず、通撰の字については現代呉方言でも中古音の η 韻尾を保っており、当時も η 韻尾であったと考えられる。

宕撰は現代呉方言において η 韻尾の弱化和共にその母音が鼻音化することがある。当時にもこの現象が起こっていたとすれば、橋本 (1950) の推定のように、宕撰の字が当てられたガ行音の前の音節の母音が鼻音化していた可能性がある。だが、もしそうならば、ガ行音の前にだけでなく、同じく鼻音的要素を有するダ行音の前にも宕撰の字が用いられてよいはずである<sup>13</sup>。しかし、宕撰の字の多くはガ行音の前の音節に用いられている。したがって、宕撰はそのときまだ η 韻尾であったと考えたほうがよいであろう。ただし、宕撰の η 韻尾を利用して、該当音節の母音の鼻音化を表したという可能性もあるのではないかという問題が出てくる。これについては最後に述べることにする。

梗撰の場合は少々複雑である。その二等が現代呉方言では白読音 (方言における固有の字音) は宕撰と合流しており、母音の開口度が広い。二等の文読音 (官話音の影響を受けた新しい字音) は三四等と合流しており、母音の開口度がやや狭くなっている。【表 2】では、二等が専らア段に当たっており、当時の音価は現在の白読音に近い音であったと推測できる。また、ほぼガ行音の前にしか現れないので、η 韻尾であった可能性が高い<sup>14</sup>。

ここで注意すべきなのは梗撰三四等である。現代呉方言において梗撰三四等 (文読) は臻撰と合流している<sup>15</sup>。しかもその合流はかなり早い時代まで遡ることができる。例えば、元末 (14 世紀半ば) の南戲『琵琶記』(大島正二 1972)、

<sup>12</sup> 【表 2】の中では前の音節に用いられた字、それに当てられた仮名、及び字の出現回数 (数字) を並列する。例：公コ (1) は「公」が「コ」の表記に一回当てられていることを意味する。

<sup>13</sup> 語中濁音の鼻音的要素が最後まで残るのがガ行音であるが、『日本考略』ではダ行音の前にも鼻音的要素が観察されている。ダ行音については別稿で論じたい。

<sup>14</sup> 5 例のうち例外は 1 例。末尾の資料の 28 番を参照。

<sup>15</sup> 現代呉方言、例えば蘇州では梗撰二等 (文読)、三四等、曾撰、臻撰、深撰の鼻音韻尾は合流し、[-ŋ]となっているが、ここは便宜上、梗撰三四等と臻撰をのみ取り上げる。

また、呉方言に基づいた明成化年間（1468–1487）の説唱詞話の各本では（古屋昭弘 1984、1986）、梗撰と臻撰に属する字が押韻や同音仮借の面で通用していることがすでに報告されている。そして、『日本考略』と成立年の近い明の呉語字書『同文備考』（1540）にも混同例が見られるという（丁鋒 2001）。

したがって、『日本考略』の成立時（1523）にもその合流が起こっていた可能性が十分に考えられる。【表 2】で梗撰三四等に属する「明」の具体例を見てみたい。

「明」は『日本考略』の中の四か所に使われている。

極好	明哥多	ミゴト
水	明東	ミヅ
水銀	明東措泥	ミヅカネ <sup>16</sup>
白酒	明東晒箕	ミヅサケ

「東（ヅ）」の前に置かれたのは「ゴ」と「ヅ」の鼻音的要素を表すためであると考えられるならば、ここで「ヅ」<sup>17</sup>の鼻音的要素を表すには臻撰つまり中古音における n 韻尾の字、例えば「民」<sup>18</sup>を用いたほうが適切である。ここで、それを使わずに「明」を用いたのは、当時において「明」が属する梗撰（文読）が臻撰と合流し、「明」と「民」との韻尾の区別が失われていたためではないかと思う。

ただし、現代呉方言において、両撰の韻尾が合流し、[-ŋ]になる地域と[-n]になる地域とがともあり、音韻的に/n/と見なされているし、南戲や説唱詞話からは当時、両撰の合流したことが分かっても、合流後の韻尾の実際の音価を知ることが困難である。

いずれにせよ、ここでは、日本語の「ミ」を表し、同時に後接の濁音の鼻音的要素を示すためには、狭母音及び鼻音韻尾を有する梗撰三四等（文読）と臻撰しか用いることができない。正確に濁音の鼻音的要素を表すことより、「ミ」の母音を表すことが優先されたと考えられる。つまり、当時、もし両撰の韻尾が[-n]であれば、例えば「極好 明哥多」の場合、狭母音+[-ŋ]の音節のほうが適切であったかもしれないが、それが存在しないため、狭母音+[-n]の音節を使うしかなかったであろう。逆に、もし両撰の韻尾は[-ŋ]であれば、例えば「水

<sup>16</sup> 「明東措泥」を「ミズガネ」と解説することもできるが、浜田氏と大友氏が指摘したように、「節用集」や「日仏辞書」などによれば、当時において「カ」の連濁がまだ発生せず、「ミズカネ」であった可能性が高いため、ここでもとりあえず先学の説に従うことにする。

<sup>17</sup> 端母[d-]に属する「東」を用いて「ヅ」を表すことは当時の日本語の「ヅ」の子音はまだ[d-]であったことを示している。ダ行子音については別稿で考察したい。

<sup>18</sup> 現代蘇州方言では「民」は[mi:n]、「明」も[mi:n]（口語では[me:n]と読まれる場合もある）。

明東」の場合、狭母音+[-n]の音節が存在しないため、狭母音+[-ŋ]の音節を使うしかなかったのである。

### 3.1.2. 中古音における n 韻尾の字

この節では【表1】の見母におけるガ行音に対して、前の音節に中古音における n 韻尾の字が使われた 4 例を見てみたい。

n 韻尾：	東	熏加□	ヒガ□ <sup>19</sup>
	鬚	薰計	ヒゲ
	無工夫	一孫 水	インガシ
	長子	難解水	ナガシ

「熏」、「薰」、「孫」（「熏」は「薰」と同音）の 3 字は臻撰に属するものである。この 3 字がガ行音の前の音節として用いられている理由は上述の「明」と同様で、梗撰三四等（文読）が臻撰に合流したことによるものと考えられることができる。

「難」については、ここの「ナ」に当てるには n 韻尾を持つ宕摂一等泥母の字、例えば「囊」<sup>20</sup>を使ってもよかつたはずであるが、寄語の中には宕摂一等泥母字が一字も現れないので、それと比較することはできなかった。ただし、宕摂一等のほかの字にはア段より、オ段の音を写すことが多かつたので、当時においてはやはり「難」の母音の方がア段の発音に近かつたのではないかと思うが、さらに考察が必要である。

### 3.1.3. 前音節の鼻音韻尾と清音との対応

ここまでは前の音節の鼻音韻尾とガ行音との関係のみを述べてきた。ただ【表1】の見母と溪母の欄において前の音節に鼻音韻尾をもつ字でありながら、清音と対応しているものもある。それは見母の 5 例と溪母の 1 例である<sup>21</sup>。そのうちに以下の 2 例はやや状況を異にする。

香	宣哥	センカウ
沉香	沉哥	デンカウ

2 例とも漢語であるが、「宣」と「沉」との鼻音韻尾は後接の濁音を写すのではなく、単に撥音の「ン」を表すために使われているのではないかと思われる。

そうとすれば、前の音節の鼻音韻尾が後続の清音音節と対応するという例はわずかに 4 例となり、全体に対する比率はかなり低くなると言えよう。

<sup>19</sup> □は脱字と思われるところ。

<sup>20</sup> 現在、蘇州では[nŋ]。

<sup>21</sup> 資料の 28～33 番を参照。



#### 4. ガ行音の入り渡り鼻音について

以上、『日本考略』においては、ガ行音の鼻音的要素を写すために、基本的に前の音節に通撰、宕撰、梗撰の字を用いることが分かった。臻撰の字も用いられているが、それは当時の呉方言において梗撰三四等と臻撰とが合流していたためであると考えられる。

そうであるならば、『日本考略』に反映されたガ行子音の音価について、以下のように推定することができる。

- 一、上に残した問題でもあるが、ガ行音の前の音節に  $\eta$  韻尾の字を利用したのはその音節の母音の鼻音化を表していたのではなく、ガ行子音側の鼻音的要素を表していたのである。というのは、 $\eta$  韻尾の字の使用率が高いからである。つまり、母音の鼻音化だけを表すには、 $\eta$  韻尾の字でも、 $n$  韻尾の字でもよかったのに、数字が  $\eta$  韻尾に偏っているのである<sup>22</sup>。
- 二、ガ行子音は単純な濁音  $g$  ではない。その根拠は、浜田（1952）にも指摘されており、呉方言には全濁字である群母字が存在しているため、日本語の濁音をその字で表すことができるのにもかかわらず、その前の音節に鼻音韻尾の字を用いているからである<sup>23</sup>。
- 三、喉内鼻音  $\eta$  でもない。なぜならば、中古音にいう疑母  $\eta$  が現代呉方言にも存在しており、当時も存在していたと考えられるが、しかし、ガ行音を表記する際には一度も使われなかったためである。

以上から考えて『日本考略』が反映したガ行子音が入り渡り鼻音を持つ  $g$  であった可能性がもっとも高いと言えよう。

#### 5. 結び

以上、日本寄語に現れたガ行音を見てきた。『日本考略』において、梗撰三四等（文読）と合流した臻撰の字を除き、ガ行音の前の音節にほぼ  $\eta$  韻尾の字を用いており、字とガ行音との対応は「まちまちで、不完全」なのではなく、実は極めて整然としていることが分かった。なお、ガ行音の前の音節に  $\eta$  韻尾の字を用いていることは「単なる濁音表記」ではなく、入り渡り鼻音を有するガ行音を写したのではないかと考えられる。

また、今回の考察を通して、ガ行音を写す際には、鼻音的要素つまり入り渡り鼻音が大きな標識であることを改めて確認した。もちろん他の要素<sup>24</sup>もそれ

<sup>22</sup> ただ、子音側の鼻音的要素によって、前の音節の母音が鼻音化する可能性もある。

<sup>23</sup> 現代呉方言における全濁字は語頭に来る場合、実は無声子音で現われ、その次に  $[ŋ]$  音があると言われている。例えば、語中は  $[gŋ-]$ 、語頭は  $[kŋ-]$  である。当時の群母字と日本語のガ行音とも異なっていたかもしれないが、しかし、それは音声上の区別であり、【表1】の清濁の対応からも分かるように、当時の中国人にとってはガ行音がやはり群母字に近いと聞こえたのではないかと思う。

<sup>24</sup> 例えばアクセントの要素。

に關与している可能性もある。寄語を研究する際に母音、子音及び声調という音節全体あるいは語全体を総合的に考察しなければならない。なお、『日本考略』に記録した日本語にも、基づいた中国語と同様、地域的な問題がある。つまり記録された日本語の地域性は未だ完全には究明されていない。それらを今後の課題として残しておきたい。

#### 【参考資料】

- 王鳴鶴 『登壇必究』萬曆二十七年刻本影印本 1599、〈中国兵書集成〉1987、解放军出版社・遼沈書社。
- 薛俊 『重刊日本考略』1530、東洋文庫所藏。
- 薛俊 『重刊日本考略』重刊本写本、早稲田大学図書館所藏。
- 薛俊 『日本國考略』重刊本写本、江戸中期？東大史料編纂所藏 No. 4345-1。
- 薛俊 『日本國考略』重刊本写本、内閣文庫重刊寫本影印本 1974、東大史料編纂所藏 No. 6145-5。
- 薛俊 『日本國考略』北京圖書館藏明藍格鈔國朝典故本 1542、〈四庫全書存目叢書・史部第 0255 冊〉1997、齊魯書社。
- 薛俊 『日本國考略』、〈國朝典故〉鄧士龍編 1542、許大齡・王天有校正 1993、北京大学出版社。
- 薛俊 『日本考略』重刊本建仁寺兩足院謄写本 1887、東大史料編纂所藏 No. 2045-43。
- 薛俊 『日本考略』、〈得月篋叢書〉清道光、榮譽編。
- 鄭若曾 『籌海重編』明鄧鍾重輯、〈四庫全書存目叢書・史部第 0227 冊〉1997、齊魯書社。
- 鄭若曾 『籌海圖編』明、李致忠點校 2007、中華書局。
- 鄭若曾 『日本圖纂』一卷、〈鄭開陽雜著〉浙江巡撫採進本影印本 1932、鄭起泓編、陶風樓。
- 陶珽 『說郛統』、〈說郛三種〉明刻本影印本 1988、上海古籍出版社。
- 茅元儀 『武備志』天啓初刻本影印本 1621、〈中國兵書集成〉1987、解放军出版社・遼沈書社。
- 茅元儀 『武備志』鵝飼石齋訓點 1792、賭春堂。
- 茅元儀 『武備志』1621、蓮溪草堂。

#### 【参考文献】

- Joseph Edkins “A Chinese and Japanese Vocabulary of the Fifteenth Century, with Notes, Chiefly of Pronunciation”, *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, vol X, May. 1882.

- 大島正二 「『琵琶記』の用韻に反映した元末吳方言—その音韻体系の一端について—」『東洋学報』54 (4)、1972、1-32 頁。
- 大友信一 『室町時代の国語音声の研究』1963、至文堂。
- 大友信一 「室町時代の国語音」『音声学会会報』第113号、1963、1-3 頁、日本音声学会。
- 木津裕子 「『日本寄語』所反映の明代吳語聲調」『中國境内語言暨語言學』第二輯 1994、中央研究院歷史語言研究所出版品編輯委員會、李壬癸・黃居仁・湯志真編。
- 京都大学文学部国語学国文学研究室 『日本寄語の研究』1965.9、京都大学国文学会。
- 土井忠生他 『邦訳日葡辞書』1980、岩波書店。
- 丁鋒 『『同文備考』音系』2001、中国書店。
- 丁鋒 「『日本考略・寄語略』反映の十六世紀吳語音韻」『海外事情研究』2004.09、197-211 頁、熊本学園大学付属海外事情研究所。
- 丁鋒 『日漢琉漢對音與明清官話音研究』2008.08、中華書局。
- 趙元任 『現代吳語的研究』1956、科学出版社。
- 藤堂明保 『中国語音韻論』1957、江南書院。
- 『日本国語大辞典』第二版 JapanKnowledge (ジャパンナレッジ)  
<https://fp.wul.waseda.ac.jp/vdesk/hangup.php3?cleanup=1> (2010.11.1 アクセス)。
- 橋本進吉 『国語音韻史』1966、岩波書店。
- 橋本進吉 『国語音韻の研究』1950、岩波書店。
- 浜田敦 「日本寄語解説試案」『人文研究』第2巻第1号、1951 (『日本寄語の研究』所収)。
- 浜田敦 「撥音と濁音との相關性の問題」『国語国文』第21巻第3号 1952、198-212 頁 (『日本語の史的研究』所収)。
- 福島邦道 「『日本寄語』語解」『国語学』No.36、1959.03、69-78 頁、国語学会。
- 古屋昭弘 「『度曲須知』に見る明末の吳方言」『東京都立大学人文学報』No.156、1982.3、65-82 頁。
- 古屋昭弘 「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言」『中国文学研究』第十期 1984、29-50 頁。
- 古屋昭弘 「明刊説唱詞話 12 種と吳語」『中国文学研究』第十二期 1986、1-18 頁。
- 北京大学中国语言文学系语言学教研室 『汉语方音字汇』(第二版重排本) 2003、语文出版社。
- 森田武 「捷解新語解題」『捷解新語国語索引並解題』1957、京都大学国文学会。
- ロドリゲス 『日本大文典』土井忠生訳註 1955、三省堂。

【資料】

		寄語校訂 (本文) <sup>1</sup>	解説	19	極好	明 <u>哥</u> 多	ミゴト
前音節が通撥、梗撥、宕撥の例 (波線部は字例)				前音節が臻撥の例			
1	金	空 <u>攪</u> 泥	コガネ	20	東	熏 <u>加</u> □	ヒガ□
2	紅銅	鶯更 <u>措</u> 尼	アカガネ	21	長子	難 <u>解</u> 水	ナガシ
3	男子	阿奈公 <u>姑</u>	オノコゴ	22	無工夫	一孫 <u>水</u>	イソガシ
4	外甥	萌 <u>哥</u>	マゴ	23	鬚	薰 <u>訃</u>	ヒゲ
5	亂説	思量骨多	スラゴト	語頭に当たるガ行音の例			
6	便來	羊 <u>解</u> 地何爺 俚	ヤガテオヤレ	24	挹	科眉乃 可恨奈礼	ゴメンナ ゴメンナレ
7	小刀	空 <u>查</u> 打乃	コガタナ	25	莫旌	<u>哥</u> 面乃礼	ゴメンナレ
8	扇	黄 <u>旗</u>	アウギ	26	鵝	解 加	ガ ガ
9	泥金扇	空 <u>措</u> 泥黄 <u>旗</u>	コガネアウギ	前音節が開音節の例			
10	鑰匙	坑 <u>其</u>	カギ	27	怠慢	難利骨多罵 山奴 <sup>2</sup>	ナニゴトモウサ ヌ
11	泥銅扇	法古黄 <u>旗</u>	ハクアウギ	鼻音韻尾に後接する清音の例			
12	鋸	拏剛 <u>擊</u> 利	ノコギリ	28	紅銅	鶯更 <u>措</u> 尼	アカガネ
13	鏡	坑 <u>皆</u> 彌	カガミ	29	水銀	明東 <u>措</u> 泥	ミヅカネ
14	手巾	達昂 <u>企</u> □	タノゴ□	30	罌	烏爺 <u>蠻</u> 訃	オヤマキ
15	大麥	烏蒙 <u>崎</u>	オオムギ	31	酒盞	晒加 <u>藤</u> 訃	サカヅキ
16	小麥	柯蒙 <u>崎</u>	コムギ	32	香	宣 <u>哥</u>	センカウ
17	杉	松 <u>訃</u>	スギ	33	沉香	沉 <u>哥</u>	デンカウ
18	羊	羊 <u>其</u>	ヤギ				

- 1 「寄語校訂」とは筆者が各本の音注漢字を対照し、先行研究の成果を踏まえ、諸本との対照や考証により東洋文庫本に見られる誤刻を改めたものである（本稿に挙げた例では27番の一例のみ）。□は脱字があると思われるところを示す。
- 2 ここは東洋文庫本、国朝典故本では「難利是罵山好」、『日本図纂』や内閣文庫本などでは「難利骨多罵山奴」であるが、浜田（1951）、大友（1963）では後者を選び解説した。本稿はそれに従い、東洋文庫本を校訂した。